放送 3月19日
再放送 3月20日

3月 ゲストトーク

福祉と私
―地域を一つの大きな家族に

要点

- 今日のゲストトークは、神奈川県藤沢市の団地で、主に団地にお住まいの高齢者を対象とした介護事業所を運営している菅原健介さんにお話を伺います。菅原さんは介護事業とNPO活動の両輪で地域に根ざしたつながりづくりをしています。

小規模多機能型居宅介護ぐるんとびー

神奈川県藤沢市湘南大庭地区は、江の島から車で一五分ぐらい北上したところにある三万二〇〇〇人が住むエリアです。約四〇年前に建築家の黒川紀章さんが設計されて、農業と都市の融合をテーマにつくられたニュータウンです。その当時三、四〇代だった方が今、七〇、八〇になっているので、高齢化率が高く約三二%で、藤沢市に一三地区ある中で一番高くなっています。

「小規模多機能型居宅介護ぐるんとびー駒寄」は、湘南大庭地区の団地にあり、UR都市機構の団地の一部屋を活用するというのは全国で初めての事例になっています。定員二九名で、現在、四〇代の方から一〇〇歳近い方まで二八名利用しています。珍しく男性も多く、男女比は四対六ぐらいです。平均要介護度は3以上、要介護5の方や見取りをする方もいます。

小規模多機能型居宅介護は、顔が見える関係性の中で、デイサービスと訪問介護、困ったときとかちょっと家族が休みたいときに泊まれるショートステイの三つを一つ

理学療法士・株式会社ぐるんとびー社長
菅原健介（すがはら・けんすけ）

一九七九年、神奈川県生まれ。中学・高校を東海大学デンマーク校で過ごし、東海大学在学中は野宿しながら各国を放浪。広告会社に勤務後、理学療法士に転職。回復期リハビリテーション病院在籍中に東日本大震災が起こり、ボランティアとして石巻・気仙沼で活動。二〇一五年、株式会社ぐるんとびーを設立、藤沢市の団地の一室を使って小規模多機能型居宅介護ぐるんとびー駒寄を開設。二〇一七年、通りを隔てた棟の一階にぐるんとびー訪問看護ステーション、二〇一九年に居宅介護支援事業所、二〇二〇年には看護小規模多機能型居宅介護も開設し、ここが地域交流スペースにもなっている。二〇二〇年、特定非営利活動法人ぐるんとびーを設立。また、湘南エリアを中心とした多業種・多職種の交流会「湘南きずなの会」、「湘南大庭会」、「共創かまくら」を仲間とともに主催。

の事業所で提供する介護保険のサービスです。定額制で何回利用しても一定の金額です。体調が悪いときや退院直後などたくさん訪問が必要だったり泊まりが必要だったりするときもあれば、生活が落ち着いてきたらそんなに回数も必要ないので、状況によってサービスを変化させていけるのがよいところだと思っています。

「ぐるんとびー」という名前の由来はデンマークにあるんです。僕自身が中学・高校を東海大学付属のデンマーク校で過ごしました。そもそも東海大学ができたのも、創始者が内村鑑三の書いた本を読み、その教えを受けて、デンマークの教育による国づくりの歴史に啓発されたからなんです。内村鑑三に『デンマルク国の話』という本があって、内村が影響を受けたのがニコライ・F・S・グルントヴィという、デンマークの教育の父といわれている人です。「ぐるんとびー」の名前はそこに由来しています。

グルントヴィが今から百何十年前に、国民一人ひとりが自分たちで考えて生きる必要があると言ったそうです。デンマークの民主主義は、グルントヴィが言っていた皆で対話をし合うというのが基本になっていると言われています。僕らが目指しているのも、地域に住む皆で話し合いながら、どうやったらほどほど幸せに生きられるのか考えていくというところなので、名前をグルントヴィからお借りしました。

団地内の介護事業所

ぐるんとびー駒寄は、UR都市機構の全部で四棟、二四〇世帯ある団地の中の、一〇階建ての棟の六階にあります。

そして、僕の家が五階で妻や子どもたちと住んでいて、四階に妻の母が住んでいて、八階にはスタッフとアルツハイマー型認知症の八四歳のおじいちゃんがルームシェアをしています。それ以外にも団地の中に、地域のシングルマザーと認知症のおばあちゃんのルームシェアがあったり、スタッフも一〇人ぐらい住んでいて団地の役員をしていたりします。なので、利用者やスタッフが仕事が休みの日でも会ってしまい、皆がご近所さんみたいな形でやっているんです。

朝起きてうちの子どもたちが外に出ると、たまに認知症のおじいちゃんが一人で外に出ようとしていて、行くところがわからなくなっているのを息子が発見して、僕らに電話をくれて、僕らが部屋にお連れするというようなこともあります。

午前九時から午後六時までがデイサービスの時間で、九時ぐらいになると団地の中に住んでいる方が、認知症が現れたり骨折されていたり脳梗塞の後遺症で片まひだったりする方でも一人で来られます。昼になると皆で外食に行ったり、作って食べたいという方は中で過ごします。思い思いに日中を過ごして、夜になると帰るという過ごし方をしています。

というのは、毎日、介護事業所でご飯を食べるというのはちょっとおかしいと思うのです。それまでしていた当たり前の生活を、一緒にお手伝いしながら継続していくというやり方をしています。お墓参りに行きたいと言えば行くし、プールに行きたいと言う方がいたら週一、二回は一緒に泳ぎや歩きに行きます。花見の時期は花見をし、ときどきバーベキューをやったりもします。

でも、利用者の言う通りばかりでなく、我慢してもらうときもあり、話し合いながら一緒に暮らしているというイメージです。

なぜ、団地で介護事業をやろうと？

僕は大学のあとに、広告会社に勤務し、退職した後、理学療法士の資格を取って働いていたんですが、そこに東日本大震災が起こったんです。僕の母親の菅原由美が全国訪問ボランティアナースの会「キャンナス」という、日本で一番大きな看護師のボランティア団体をやっていて、東北の現地のコーディネーターがいないということで、僕も二〇一一年の三月から現地に入りました。四月に勤務していた病院を辞めさせてもらって、現地にずっといたんです。

このときに、避難所や仮設住宅で感じたのは、人のつながりの大切さ、平時からの顔の見える関係、お互いさまで助け合うということでした。もう一つ、一番大事なのは、正しいというのをお互いにぶつけ合わないで、ほどほど自分に都合が悪いことも飲み込み合いながら、一緒に生きていくというところが必要だと思ったんです。

そこをどうしたら平時から関係性をつくれるのかと考えました。団地という皆当たり前に暮らしているところに介護事業所を入れながら、お互いさまで生きていく。困ったら助け合うし、団地の中に看護師も理学療法士も作業療法士も介護職も住んでいるので、相談できるというところをつくろう。そう思ってぐるんとびーを始めました。

団地の近さは、すぐ「助けて」と言えるのがメリットです。災害のときにも強いと思って、それも含めて僕はやっているんですが、福祉避難所とかを特別つくらなくても、団地の中に避難して、そこに看護師や介護士が住んでいれば、本当に困ったときは団地全体をケアできると思うのです。

株式会社ぐるんとびーのスタッフは全部で約七〇人いて、そのうち三〇人ぐらいが地域の役員をやっています。防災、街の美化、子どものこと、まちづくりなどの委員だったり、自治会の役員だったり。僕とスタッフ三人も大庭地区の自治会連合会の役員をやっています。皆が普段から地域活動をやっています。

最初に僕たちが団地に入ってきてぐるんとびーを開設したときには、もともと団地に住んでいた人たちからは反発も受けました。僕らの「地域を一つの大きな家族に」という考えを押してくださる方もいて、乗り越えながら六年かかってここまできました。今はだいぶ好感をもってくれている人も増えてきたという話をいろんな方から伺うのですが、かといって全員が全員いいと思っていないですし、「ぐるんとびーは絶対使わないぞ」と言う方もいます。その人、そのときの必要性によって受け止め方は変わるのだから、全員が「ぐるんとびーは素晴らしい」などと言うようになったら僕も気持ち悪いし、皆さんも文句も言えなくなってしまうでしょう。あまり好きじゃないという人もいたほうが健全かなと思っています。

このあいだも、認知症のあるおじいちゃんがぐるんとびーに来る途中に、エレベーターの中でうんちが出ちゃったんです。臭いがするので、団地の方から「いいかげんにしてくれ」と話があったんです。そういうときもありますよね。暮らしなのでそういうのを全部なくすというのは難しい。いろいろなトラブルが起こりますが、そのつどスタッフが話し合って許していただいたりしています。

家族の中でけんかのない家族なんてないですよね。どうやってお互い折り合いをつけながらみんなで生きていくのかというところが、団地の中でこれから求められてい

くんじゃないかと思っています。

「地域共生社会」といわれ、厚生労働省がぐるんとびーを取り上げてくれたりしていますが、僕らは今、大庭地区に住んでいて、困ったときにみんなでどうしたら助け合えるのかというところのツールとして介護事業所をやっているだけなのです。

介護事業だけではなくて、今度は花屋をやろうと思っていたり葬儀屋さんもやろうと話していたりするんです。困っている人がどういうところに行きやすいのかと言ったら、こども食堂とか何々食堂とか福祉事業所よりも、ハンバーガーが一〇〇円ですと言ったら皆さん来るんじゃないか、そうしたらそういうことを僕らはやるんじゃないかと思っていたりします。

地域共生のあり方は、その地域によって、そこで生きている住民が皆で考えながらどういうものがあったらいいのかとつくっていくものだと思います。人材も文化もいろいろ違うので、そこの中で試行錯誤しながら、ほどほど幸せだよねといえるところを目指していくこと自体が地域共生なのではないかなと思っています。

一つの形というのはないんじゃないかなと思っていて、あまり作り込み過ぎるとそこにはまらない人たちが取り残されてしまうし、そこに生きる住民たち一人ひとりが対話しながら共に生きるということを考えていくことが一番大事だと思っています。

『NPOぐるんとびー』

二〇二〇年に設立した「NPOぐるんとびー」では、スタッフが新たな取り組みを始めることを応援しています。

その一つに「まちかど事業」というのをやっていて、「まちかど御用聞き」といって、たとえば介護保険を使っていないけれど病院の同行に来てほしいとか、お医者さんからの説明がわからないので介護士が同行したりとか、障子の張り替えとか藤棚の選定とか引っ越しの手伝いとかの依頼を請けています。

ほかにも、産前産後のお母さんの心身を支える「産後リハビリ」、子どもたちがさまざまなスポーツの体験を通して成長できる場を提供する「スポトレ」、無料の健康相談事業などもやっています。また、「まちかど司法書士」は週一回無料で相談が受けられ、離婚後の財産処分や遺産相続の相談がされたりしています。

介護事業だけでは人の暮らしは支えられないし、そもそも僕らは健康な状態でいると医療や介護は使わないで生きているし、介護を使うようになったら介護だけで足りるかと言ったらそういうわけではないです。

日中は施設を開放し、団地に暮らす人たちが気軽に立ち寄れる場所にしています。子どもたちが出たり入ったりするし、待機児童を連れてくるお母さんがいたり、近所の方が野菜を差し入れに来てくれたり、困ったことがあると相談に来てくれたりします。

そうすると、赤ちゃんのお世話を認知症のおじいちゃんおばあちゃんがしてくれたりします。子どもの問題が見えてくると今度は子どもの事業を何かやろうかとなります。住宅の問題についても、高齢者で認知症があるとなかなか部屋が借りられないので、ぐるんとびーが借りて転貸しています。そういうことで、どんどん多岐にわたっていっています。

困ってもなんとかなる、困ったら助け合いが起こるように、地域で皆でつくり続けていきたいと思っています。